

科学文化センター開館10周年にあたって

館長 石 浦 邦 夫

「光陰矢のごとし」という言葉があるが、確かに月日のたつのは早いものである。富山市に科学文化センターの設立の機運が高まり、富山市立図書館の中に建設準備事務局ができたのは昭和51年10月である。そして「緑と文化のまちづくり」をスローガンにしている富山市がセンターの理念について熱心に討議された結果、「郷土に根ざした博物館」「市民に開かれた博物館」であることが大切であるということになり、西中野1丁目のこの地に白亜の殿堂がオープンしたのは昭和54年11月23日のことであった。

以来、長井真隆前館長を中心に学芸課、総務課が一体となって全国でもユニークな博物館活動を展開してきた。特に展示、普及教育、調査研究ならびに資料収集保管の事業を4本柱として位置づけ、「足腰のしっかりした4輪駆動の博物館であること」を大切にしてきた。

しかし、活動が盛んになり、成果が蓄積されればされるほど、展示室、学習室や収蔵庫など、建物そのものの狭隘さを痛感するようになってきた。別館建設の計画が持ち上がったのは今から5年前である。市当局と通商産業省との深いご理解とご支援により、本年の7月19日めでたく竣工式が挙行政され、あわせて竣工記念特別展「深海」開催のはこびとなった。また、新しい常設展示「富山の四季」も新設された。

さて、この十年間に90万人余りの人々がこの館で楽しみ、学んで下さった。32万都市の地方の博物館としては決して少ない数ではないと思う。

しかし、歳月とは無情な面を持っている。コンピュータやVTRの普及など、ここ十年間に社会情勢が大きく変化し、また観客のニーズも大きく変化してきた。そのことにより、設立当時の清新さが少しずつ色あせてきたかのように見える。

開館十周年に当たり、現在職員は自然史展示室の展示替え、さらには理工展示室の展示替えに鋭意知恵をしばっている。むこう20年を目指しながら「館の新らしい機能は如何にあるべきか」「それにとまなう展示は如何にあるべきか」について検討中である。この館の運営の基本的理念は不易である。しかし、時代に応じた社会のニーズにどの様に應えていくかということも大切なことである。

開館十周年の節目に当たり、若竹がすくすく青空に向かって伸びていけるのは、一節一節ががちりとしていることに思いをはせ、この十周年目の一節を大切にしていきたいと思っている。